

# 視察報告

## ネパール連邦民主共和国

○視察者：豊橋市議会議員 豊田 一雄

青年海外協力隊 OB が作る愛知アジアスカラーシップの調査旅行に同行

○視察先：ネパール連邦民主共和国（ポカラ市、カトマンズ市、パタン市）

○目的：2006年の都市宣言における「平和」への貢献活動の先行事例を視察するため。

本市においては平和・交流・共生の都市宣言が行われたが、三つの内でも平和への取組みについては今年度戦争体験談の映像DVDが作成されたのみで最も遅れていると言える。市民が参加できる平和への取組みが重要と考えるが、その方策についてはまだ馴染みがなく研究を要している。一方、国連のユネスコ憲章の前文では、「世界の諸人民の教育、科学及び文化上の関係を通じて、国際連合の設立の目的であり、且つその憲章が宣言している国際平和と人類の共通の福祉という目的を促進する」としている。このことから、経済力が弱く貧困に苦しむ人の多い国に対する教育や文化・自然遺産の保護の支援を行う、ユネスコ活動等が参考になるものと考えられる。ネパールには、かつて豊橋の奉仕団体が日本ユネスコ協会連盟を通じて校舎建設に協力した小学校がある他、豊橋の団体による支援活動が多く存在している。これらの活動の現場を視察することで、今後の豊橋市の「平和」への貢献のあり方を考える機会とすることを目的とする。

○ネパールの国情：

- ・人口 2,589万人（2005年／2006年度 政府中央統計局推計）
- ・面積 14.7万平方キロメートル
- ・首都 カトマンズ
- ・政治

1769年にプリトウビ大王による国家統一がなされ、1846年からラナ将軍家による専制政治が行われたが、1951年に王政復古。1990年に民主化運動を経て、国王親政体制から立憲君主制へ移行した。しかし、1996年以降、マオイスト（共産党毛沢東派）が武装闘争を開始し、国内の広い地域を勢力下に収めていった。2001年には、ディペンドラ王太子（事件直後、国王に即位）が父・ビレンドラ国王ら多数の王族を殺害したとされる事件が発生。王位を継承したディペンドラも3日後には自殺したとされる。真相は不明。王位を継承したギャネンドラ氏は毛沢東派勢力の制圧が進まないことを理由に非常事態宣言を発令して議会の停止し、内閣を親しい人間でかためるなど専制的な政策をとった。その後、民主化運動が拡大したことにより、制憲議会選挙が2008年4月に行われた。5月28日には制憲議会の初会合が開催され、連邦民主共和制への移行が宣言され、王制が廃止されることとなった。本視察中の6月23日、初の大統領に第2党のネパール会議派のラム・バラン・ヤダブ書記長が、宣誓し就任した。今後、民主化進展に向けほのかな兆しは見えたよ

うにも見えるが、先行きは不透明とのこと。

※大統領就任を記念して翌 24 日は国民の祝日となった。この日、大統領を乗せた車列が目の前を通過するのを目撃し、同国の重大な転機を目の当たりにしたことを実感した。

・経済情勢

経済成長率は、マオイスト問題による治安の悪化等により、2001/2002 年度にマイナスを記録したが、2003/2004 年度は 3.3%に回復した。しかし、2005 年 2 月国王措置（デゥバ首相を解任し自ら政権を掌握するとともに、緊急事態令を発令し、基本的人権の一部制限、政党指導者等の拘束、報道に対する検閲を実施）が主要サービス産業である観光業に深刻な影響を与えたほか、天候不順による農業部門の不振、輸出産業の不振により 2.0%にとどまった。2005/2006 年度は前年度を僅かに下回り 1.9%とされ、経済の低迷が長期化しつつある。

・宗教 ヒンドゥー教徒（80.62%）、仏教徒（10.74%）、イスラム教徒（3.6%）他

・識字率 53.7%（2001 年 国勢調査）

・日本との時差 3 時間 15 分

○主な日程と視察内容：平成 20 年 7 月 17 日(木)～7 月 27 日(日)

7 月 17 日(木)20:45 豊橋駅発

7 月 18 日(金)01:00 中部国際空港発バンコク経由にてカトマンズに向かう

7 月 18 日(金)12:45 カトマンズ・スヴァルナブミ国際空港着、午後は市内見学

**[パタン市内見学]** 空港到着後、カトマンズに隣接するパタンのホテルにチェックイン。1 時間程休憩した後、2 時間程度徒歩で市内の様子を見た。

大きな通りの交通量はものすごい。大半がバイクと軽自動車でその中に普通車、トラック、バス、乗り合い三輪電気自動車、自転車などが混じる。徒歩の人も多い。放し飼いの犬も多く、ヒンドゥー教の国だけに放し飼いの牛もよく見られる。信号は数少なく、あっても電気が消えていたり点滅が多く、信号待ちするという風景は稀にしかない。交差点の右折や合流は強引な車が優先される。車はそれぞれ 10 秒に 1 度以上はクラクションをならしているようだ。埃と排気ガスがひどく、マスクをしている人も多い。横断する人は往来する車のわずかな隙を狙う。日本人には真似できないと思われる程、危険な芸当をしている。政治の混乱により、この国ではまだまだ様々なルールが確立していないことが想像され、国民が苦勞している様子が垣間見られたように感じた。

道路には 1 車線を占領するように車の列が数百 m 形成されている



のをよく見かけた。この国ではペトロラインと呼ばれる燃料の給油待ちの車列だった。石油は主にインドから購入しているが、その支払いが滞っていることによりインドが販売量を制限していることによるとのこと。後日、タクシーの運転手に聞いたところでは、2日半並んで10リットルしか入れてもらえなかったそうだ。このペトロラインが原因となり、通勤時間帯の渋滞は苛烈を極める。警察官もたまに見かけるが、ほとんどなす術がない。さらに石油価格の高騰は物価にも影響を及ぼし、1年前に比べてあらゆる物の価格が2倍強にもなったという。

小さな通りに入ると、とりあえず舗装はしてあるものの穴だらけ。あちこちにゴミの山があり、犬や牛の排泄物も見られる。家はレンガを積んで作った古い家が多く、貧しさを実感した。

7月19日(土)朝 飛行機でポカラ市に向かう

7月19日(土)午前 ポカラ着。ネパールは土曜休日のため(日曜は平日)、市内見学

**[ポカラ市内見学]**午後、ポカラのホテルにチェックイン。3時間程度徒歩で市内の様子を見た。トレッキングの出発点となる町であり、オフシーズンとは言え西洋人風の観光客がよく見られる。特にペワ湖周辺には観光客相手のレストラン、ホテル、トレッキングガイド、登山用品店などが並ぶ。この町には水牛が多い。町の周辺には田んぼが広がり、農作業は主に女性が手作業で行っている姿をよく見かけた。



7月20日(日) NGO「Children Nepal」を訪問。施設見学の後、アジア・愛知スカラシップ奨学金受給希望者との面接

**[Children Nepal 見学]** Executive Director の Ram Chandra Paudel さんと面談



この組織は1995年に設立された非営利・非政府団体。教育、保健、社会福祉等の分野で活躍するネパール人が、社会的弱者である子どもたちの身体的、精神的保護を目的として立ち上げたもの。Paudelさんは奥さんとともに、この組織の中心となって運営している。建物はオランダのロータリークラブの支援により建設されたとのこと。ネパールではこの程

度の建物は200~300万円程度でできるらしい。

ネパールには、大人たちに保護されることなく社会の片隅で生きる子どもたちが多く、彼らへの政府や公的機関による援助もほとんど行われることもなく、以下の

ようなケースに直面する子が多くいる。

- ✓ 家庭内において日々の生計が成り立たず、必要最低限の衣食、教育、健康管理等の供給がなされない
- ✓ 貧困ゆえに精神的なゆとりを失い、親から子への愛情を注ぐことができない
- ✓ 社会福祉サービスが受けられていない等

このような子どもたちを救済するために、主に以下の7つの事業を行っている。

**A) Children Nepal** コンタクトセンター

学校に通えなかった子どもたちや学校をドロップアウトした子どもたちのケアなど、さまざまな形で子どもを支援する。子どもたちを学校に戻したり、職業訓練を紹介したりするほか、4歳から16歳の子どもたちを対象に、初等教育や社会的な支援、保健衛生にかかわることがらなどのサービスを提供し、ネパール語、英語、算数、図画、歌や踊りを学ぶ場の提供、カウンセリングなどを行っている。

**B) 女の子たちへの教育機会の提供**

ネパール語で“ダリット”と呼ばれる低カーストに属する女の子たちを対象にしたプログラム。家族に対し教育の必要性を説き、必要であれば低金利のローンなど緊急の救護といった形で社会的経済的状況の改善の支援も行う。毎朝7時から9時に、宿題の指導や学校の勉強の補修授業も行っている。

**C) 子どもの自立のための活動グループ**

12歳から18歳の子どもを対象とし、子どもたちが他者との触れ合いを通じて、自分の意思決定の過程を経験しながら、自分たちの権利や義務に対し、責任を持つことを学ぶトレーニング。

**D) 若い女性のための職業訓練**

最初の5ヶ月間、基本的なライフスキルの教育と洋裁や調理実習などの訓練を受けた後、続く6ヶ月を希望に応じて地元のトレーニングセンターなどで職業訓練を受ける。

**E) ハンディクラフト**

女性の収入向上の機会として、洋裁、編み物、刺繍の職業訓練を受けた18歳以上の女性がこの仕事に就いている。製品はフェアトレードに出荷している。

※フェアトレード・・・発展途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することを通じ、立場の弱い途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す運動。



**F) 家族支援**

親としての自覚を促し、公的サービスが受けられるように手助けするとともに

に、健康管理や子どもの発育についての知識を彼ら自身が見に付けるように指導する。収入を確保するために、小規模な事業の立ち上げを希望する家族に対し、低金利のローンの貸し出しを行っている。

#### G) 保健衛生

各地元地域内で、保健衛生教育や予防接種なども行っている。

#### **[愛知アジアスカラーシップ奨学金受給希望者との面接立会]**



愛知アジアスカラーシップは、ネパール各地の小学生十数名に奨学金の提供を行っており、その支給を希望する子どもの面接に立ち会った。候補者は、ネパールから JICA を通じて日本での研修生経験を持つ人達の OB 組織 “JAAN” により選抜されている。ポカラにおいては、JAAN が Children Nepal の協力を得て奨学金希望者を抽出している。

今回は男子 1 名と女子 2 名の面接を行った。面接に立ち会うのは愛知アジアスカラーシップ、JAAN、Children Nepal の各メンバー。資料として、学校の成績表とあわせて「Education Sponsorship Scheme」と題する資料が用意されている。これには、本人の年齢・健康状態・民族などの個人情報、両親の仕事などの家族情報、さらに経済的なことや両親による保護の状態などを含む家族コンディションについて記載されている。面接ではこれらを元に 1 人につき約 15 分程度、成績の推移や本人のやる気などの確認を行っている。

面接終了後、スラムにあるこの中の 1 人の家を訪問した。ブロックを積み上げトタン板とその上に石の重しを乗せただけの粗末な建物。四畳半程の一間のみ。ここで祖母と子ども 3 人の 4 人が暮らしている。奨学金を希望している子の成績はクラスで一番でありながら、祖母と長女の収入に頼るだけでは間もなくドロップアウトせざるを得ないとの見通しとのこと。



7月 21 日(月)午前 飛行機でカトマンズ市に向かう

7月 21 日(月)昼 カトマンズ着

7月 21 日(月) NGO 「Association For Craft Producers」を訪問。施設見学の後、豊橋の「ガラ紡機を贈る会」が贈った、ガラ紡機の状況を確認。その後、世界遺産に含まれる古都バクタプールを見学した。

**[Association For Craft Producers 見学]** Executive Director の Meera Bhattarai さんと面談

この組織は 1984 年に手工芸品生産を通じて女性の収入向上をめざし設立された NGO 団体。ネパール国内の 17 地方に籠や織物、銅細工などの生産者グループを持ち、総生産者数は 1,000 人以上を有し、テキスタイル、フェルト、紙、木工、銅器、陶器などの製品を生産販売する。ACP 自身は企画及びサンプルの作成を行い、販売を行う。量産品の製作は各地の生産者グループが行う。現金収入を得る機会の少ない遠隔地に住む人々に雇用の機会を与えると同時に、生産指導や販路の提供などの支援を行っている。主な販売先はフェアトレード。首都カトマンズに事務所と生産工房を持つ。ACP で働く生産者の女性たちには福利基金やカウンセリングサービスの提供、生産者の子どもへの学費援助などが行われている。



今回訪問時には、日本の青年海外協力隊のシニア隊員（茨城県出身）1 名が陶器の製作指導をしていた。また米国のノートルダム大学の学生数名は、CAD による製品のデザインという形で奉仕していた。

かつて豊橋の団体「ガラ紡機を贈る会」が女性の自立支援のため、ネパールに 4 台のガラ紡機を贈っており、1 台は万博で日本に戻り、1 台はマオイストの焼き討ちにあい破壊された。我々がこの施設を訪問した理由は、残る 2 台の内の 1 台がここにあるということを知っており、その利用状況を確認するため。このことについて質問したところ、倉庫からガラ紡機を出してくれた。「使いたいと思うが、残念ながら使い方がわからない」とのことだった。贈る会が使い方を伝授した人がきちんと伝えなかったと思われる。類似する機能を持つ小型のカーディングマシンは使われていた。因みに、もう 1 台のガラ紡機はルームジャートルという村にあるとのことだったが、針が壊れており使用不可の状態にあるとの情報を得た。



※ガラ紡機・・・打綿にかけた綿花等をブリキ製の綿筒の中に入れ、綿筒を回転させながら糸を引き出し、撚りのかかった紡績糸を得るもの。綿筒が回転する際にガラガラと音を立てることから、ガラ紡といわれた。

### **【世界遺産カトマンズ盆地の見学】**

カトマンズ盆地には、ヒンドゥー教と仏教が共存する独特の宗教文化が育まれ、東西 25Km、南北 20Km ほどの中に、重要な歴史的建造物がひしめき合うという世界にも類を見ない場所となっている。カトマンズ、パタン、バクタプールという 3 つの古都と、4 つのヒンドゥー教および仏教の建造物群が世界遺産に登録されており、レンガと木材を巧みに組み合わせた建築技



法や精緻な彫刻など独特の様式が、技術の高さを今に伝えている。この地には 7 世紀頃に王朝が成立し、13 世紀頃にこの地を治めたマッラ王朝によって建てられた王宮や寺院、伝統的な住居が多く残る。しかし、20 世紀末からの反政府活動にともなう財政難が災いして修復費の工面もままならず崩壊の危機にあるものが少なくない。そうした現状からカトマンズ盆地は危機にさらされている世界遺産に登録されている。

この日はカトマンズの東 12Km にある古都バクタプールを見学した。マッラ王の 3 人の子どもによりつくられた、カトマンズ、パタン、バクタプールの 3 つの王国はそれぞれ栄華を競い合っていたことにより、贅を尽くした建造物が作られてきた。世界遺産の建造物の中の住居には、現在も人が住む。痛みが進んだ一部の建物は UNESCO により補修が行われている。大変多くの建造物が残っており、保存のための費用は莫大なものとなることが予想された。入場料は 750 ルピー（約 1,000 円強）。UNESCO による世界遺産の保護活動の意義は、相互に文化を理解し尊重し合うということであり、お金を出すばかりでなく多くの人が見学することを促進することにも意義があるのではないかと感じた。例えば、世界遺産を訪問した人が提供する情報を集めるデータベースなどが考えられる。

7 月 22 日(火) 午前中、パタン市内の SHREE SWATANTRA SHIKSHA SADAN 小学校を訪問。午後にはチョバールの尼寺を訪問。その間に二つの世界遺産に含まれる寺院を見学した。

### **【SHREE SWATANTRA SHIKSHA SADAN 小学校訪問】**

この小学校は、豊橋の女性団体が 1993 年に日本ユネスコ協会連盟を經由して校舎の建設資金 65 万円を寄附したことにより、建設が行われた。さらにこの女性団体の代表者数名は 2000 年にもこの小学校を訪問している。その後、この小学校が存続しているのかを含め、資金援助の効果について確認するために訪問してみた。

大変わかりにくい場所にあり、タクシーで探し出すのに 1 時間近くを要した。建設当時を知る先生が 1 名残っていたので、その先生に状況を聞いた。この他に当時を知るのは校長先生（その頃は教頭先生）のみとのこと。校長室の写真ボードに豊橋の女性団体の写真が掲示されていたので、豊橋のことを知っているか訊ねてみた

がわからないようだった。しかし、この学校が UNESCO の支援により建設されたことは理解していた。この小学校には1～5年生の約50名が在籍している。校長先生と会うため、翌日再度訪問することとした。

### 【スワヤンブ (Swayambhu) の寺院見学】

この寺院はヒマラヤ地域最古のものであり、カトマンズを一望できる小高い丘の上にある。大きな目玉が描かれたストゥーパと呼ばれる塔の周りには、いろいろな仏教とヒンドゥー教の像が祀られ、二つの宗教が共存している。世界遺産の一部。



### 【チョバールの尼寺 SULAKSHAN KIRTI VIHAR 訪問】



住職の Ven. Dr. Anoja  
さんと面談

この尼寺では女性自立支援のための活動を行っている。「ガラ紡機を贈る会」とは別に、豊橋工業高校が調整をして贈った64錘のガラ紡機が置かれていると聞いたため、利用状況を聞いた。残念ながら、ここでも使い方がわからず少し離れたところにある倉庫に保管されているとのことだった。その倉庫の所有者がカトマンズを離れているために、現物の確認はできなかった。

### 【ボウダナート (Boudhanath) の寺院見学】

ボウダナートは南アジア最大級のストゥーパであり、ネパールにおけるチベット仏教の中心地。周辺には1950年代からはチベットから亡命してきた人たちが住みつくようになり、ネパールの「リトル・チベット」と呼ばれているとのこと。えび茶色の衣に身を包んだ修行僧など多くの人々がマニ車を回しながらストゥーパの周りを回る。この一角にもヒンドゥー教の像が祀られている。世界遺産の一角。



7月23日(水) 午前中、JICAを訪問。午後には SHREE  
SWATANTRA SHIKSHA SADAN 小学校

### 【JICA (国際協力機構) 訪問】 丹羽憲昭所長、福田義夫所長代理、フィールドコーディネーターの小林えみりさんと面談

SHREE SWATANTRA SHIKSHA SADAN 小学校の所在地調査への協力のお礼を伝えた。また、各国あるいは日本のNGOが行うネパールへの教育等の支援の動向について聞いた。各国ともに、限られた資金を有効に支援に活用するための方策の検討が進められた結果、Donor (援助国) が連携をする方向に進みつつあるとのこと。ネパール政府が基金を一括管理する方向にある。しかし、JICAとしてはExit Strategyに



こだわっており、この考えには賛同していない。Exit Strategy とは、被支援国を支援漬けにして支援慣れさせることなく、いつかは支援を不要とする自立の可能性を大切にするという戦略とのこと。

ネパール政府は、ドナーの協力を得て2015年までに質の高い初等教育を受ける機会を提供することや、男女間格差解消を含む6つの Education For All ゴールの達成を目指している。



6つの具体的達成目標

- ・ 就学前児童の福祉及び教育の改善
- ・ 2015年までにすべての子どもの良質な無償初等義務教育の就学と修了を達成
- ・ 青年及び成人のライフスキルの習得と促進
- ・ 2015年までに成人識字率（特に女性）の50%の改善
- ・ 2005年までの初等中等教育における男女格差解消、2015年までの教育における男女平等の達成
- ・ 教育のすべての側面における質的向上

JICAは3つの分野で協力している。

- ✓ 就学機会の拡充
  - 小学校建設計画（無償）
  - ノンフォーマル教育支援プロジェクト（コンサルタント）
  - 低カースト児童支援奨学金
- ✓ 教育の質的改善
  - 小学校運営改善支援
  - コミュニティへの働きかけを通じた効率小学校教育の質の改善
  - 長期研修 名古屋大学他
- ✓ 行政能力改善
  - リソースセンター強化プロジェクト
  - Quality School Project
  - 個別教師派遣
  - 幼児養育支援
  - 理科教育

ネパールで支援活動を行う主な日本の団体は以下のとおり。

- ・ Save The Children Japan (<http://www.savechildren.or.jp/>)
- ・ Child Fund Japan (<http://www.childfund.or.jp/>)
- ・ ACCU (<http://www.accu.or.jp/jp/index.shtml>)

各団体の教育支援の方策は大きく分けて3つになる。①建物を作る②奨学金を送る③学校運営の支援。新たに学校を作る場合には、地元の住民組織があるかどうか重要な要素となる。

※JICA 理事長の緒方貞子さん（元国連難民高等弁務官）は、JICA ホームページ上で以下のように述べられている。『貧困、紛争、環境破壊、エイズなどの感染症の蔓延、食糧問題など、地球規模の問題は今世紀に入り、ますます深刻化しています。また、貧富の差はさらに拡大しています。グローバル化が進む現在、これらはいずれも私たち日本人にとっても遠い世界の問題ではありません。日本も国際社会の一員として、世界の国々と協調しながら解決の道を模索していかねばならないのです。日本にとって、ODA（政府開発援助）は、国際貢献の主要な手段です。ODA の一端を担う JICA（国際協力機構）は、「日本の平和と繁栄は、世界の平和と安定なくしてはありえない」という考えのもと、平和で豊かな世界の実現をめざして日々努力しています。』

#### **[SHREE SWATANTRA SHIKSHA SADAN 小学校再訪問] Sanu Maiya Amatya 校長と面談**

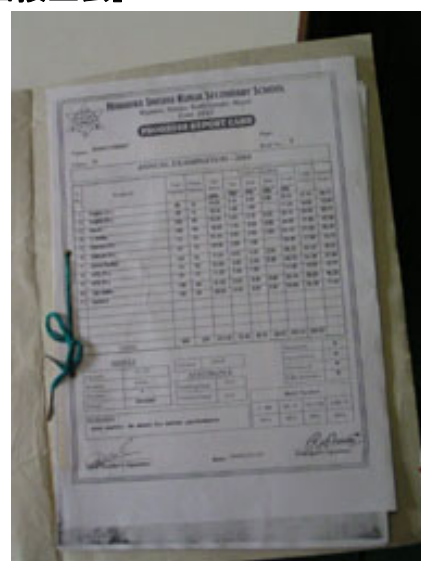
校長先生が着任した 1994 年 7 月当時は、ユネスコの支援により校舎が建設中だったとのこと。許可を得て、豊橋の女性団体からのプレゼントを生徒 1 人ひとりに手渡した。プレゼントは当地で購入。1 人あたり 100 円程度の予算で文房具屋で調達したところ、鉛筆 2 本、ノート 2 冊、筆箱 1 個、簡易鉛筆削り 1 個となった。日本で買うより相当安く、多くの物を購入することができた。



7 月 24 日(木) JAAN のオフィスで、愛知アジアスカラーシップ奨学金受給希望者との面接立会を行い、夕方にダルバール広場(Kathmandu Durbar Square)を見学した。

#### **[愛知アジアスカラーシップ奨学金受給希望者との面接立会]**

この日は、前日に初の大統領が決まったことから急遽国民の休日となった。一方で、大統領がネパール語ではなくヒンドゥー語で演説を行ったことに抗議して公共交通のストが行われたため、面接参加者の会場到着が遅れた。中には、徒歩で 1 時間半かけてたどり着いた子もあった。結局 4 名の面接を行った。面接に立ち会ったのは愛知アジアスカラーシップ、JAAN の各メンバー。資料としては学校の成績表のみで、概ね 1 人あたり 15 分程度、将来の希望、成績の状況などについて確認した。面接対象者はあらかじめ JAAN が家庭の経済状況なども考慮した上で選考し、所属学校の校長の許可を得た上で行っている。



## [カトマンズのダルバール広場 (Durbar Square) 見学]

カトマンズのダルバール広場にはマッラ王朝時代にバクタプールやパタンの王国と競ってつくられた、素晴らしい木彫や神像、建築物などが豊富に残されている。中には、生き神と崇められるクマルと呼ばれる幼い女性の館もある。世界遺産の一角。



7月25日(金) UNESCO オフィスを訪問。

多米小学校が一昨年、学用品を贈った小学校を訪問。

JAAN オフィスで奨学金受給希望者との面接立会を行った。

**[UNESCO オフィス訪問]** 教育部門の Ram Balak Singh 氏と面談した。

本オフィスはネパール政府との協定が締結された 1998 年に設置された。ユネスコの優先プログラム領域は、教育、文化、Communication & Information。教育プログラムではネパールで行われている Education for All (EFA) 運動のサポートなど



初等教育に重点を置き行われている。本オフィスでは直接支援活動を行うことは少なく、実態調査などの活動がメインとなっている。その内容は①読み書き能力②ローカル言語での数学教育③万人の教育④15 歳以上の読み書き能力⑤男女平等⑥教育の質などの項目についての調査を行っている。

ネパールにおける就学率は 1 年生入学時で約 89%。その後ドロップアウトする子があるため、5 年生では 17~18%が不就学となる。JICA は教師教育やドロップアウトした子のための教育コースを作ったり、奨学金を設けるなどの協力をしてくれている。

**[Shree Bal Vidyashram Primary School 訪問]**

この学校には 2006 年豊橋市立多米小学校児童から文房具が贈られており、その後の様子を確認した。現時点でこの小学校に在籍するのは、1~5 年生で児童数は約 150 名。教員は 5 名。午前 10 時から午後 3 時半まで授業を行っている。近年、児童数の増加が著しく、一つの教室をベニヤ板で二つに仕切って使うなどしている。しかし、机、椅子、教材などが不足しているとのことだった。



### **【愛知アジアスカラーシップ奨学金受給希望者との面接立会】**

この日も公共交通のストが行われたため、面接参加者の会場到着が遅れたが、5名の面接を行った。当初の予定より少なかった様子。父親も同行してきて、最初は部屋の外から様子をうかがっていたが、心配のあまり途中から部屋に入ってしまった。奨学金が重要な役割を果たしていることを察することができた。



7月26日(土) 出発前のわずかな時間にパタンの旧王宮広場を見学。

### **【パタンの旧王宮広場見学】**

マッラ王朝の古都の一つ。バクタプール、カトマンズ同様にレンガ積みと木組みを組み合わせた建物が並ぶ。寺院や住居の多くは現在も使われている。

7月26日(土)13:50 カトマンズ・スヴァルナプミ国際空港発

7月27日(日)バンコク経由で、午前9時頃中部国際空港着。豊橋に向かう。

○まとめ：今回の視察では、様々な教育活動支援、女性自立支援の活動現場をみることができた。国の政治が混乱する中で庶民の生活は困窮しており、現地の皆さんが外国からの支援、とりわけ子どもたちの教育の充実に対する支援を熱望していることを実感した。その方法についても、学校建設、奨学金支給、女性自立支援においては機械装置の寄贈など様々なものを見ることができた。今回感じたことは、どのような形で支援するにしても、フェイス トゥ フェイスの関係を持つことの重要さである。理由の一つは、支援者の意思に従った活用がされるためであり、もう一つは支援される側の本当に求めるものを理解するためということによる。さらにそのことを通じて、お互いの人間関係が形成されることが平和建設に大きく寄与することも期待できると感じた。

世界遺産の保護という視点からも見聞したが、これについては莫大な資金を要するものであり、豊橋市のような地方都市や市民団体の力では有効な支援をするのは困難であることが推察された。むしろ、多くの人々が訪れその文化を理解する機会を増やすことができるように、市民活動として情報提供をする程度の貢献が現実的だと思われる。

昨今の日本では豊かな社会が実現した結果、国や自治体から様々なサービスが提供されるのが当たり前のように感じられ、助けを必要とする人たちのために奉仕しようとする市民の心が薄れていることが危惧される。極端なケースでは、身勝手な理屈から大事件を起こすということも頻繁にあり、殺伐とした世相になっている。思い遣りに満ちた社会づくりのためには、行政として市民が積極的な平和建設への関与を行える仕組みづくりを行うことが有効な手段の一つになると、今回の視察で実感した。現在、国際交流の一環として米国に中学生を派遣するなどが行われているが、国際社会の中で役立つことのできる場を見出すためには、貧しい国を見ることが有効ではないかとも考えられる。学校教育の中で貧しい国の現状を知らせ交流を進めることや、市民団体の行う貧しい国に対する教育支援活動の促進など、今後さらにその方策について研究をしていきたい。

以上